

庖丁の菜屑の彩や夏は来ぬ

幸

身近なところから題材を拾った一句である。包丁に付着している野菜屑の色から夏の到来を実感したとの誇張のない表現に多くの賛同者を得た。夏野菜の輝きの色である。

いつまでのボーイソプラノ更衣

守

孫を題材にした一句である。今はボーイソプラノである孫も、いつかは変声期を迎える。子はいずれ親から精神的に独立し、親や祖父母とは距離を置いて行くものであるが、そのときを思うと一抹の淋しさを感じる。

故郷の空き家の数や蟬の穴

守

田舎だけではなく都会でも空き家の数は増えている。所謂パラサイトは別として、子は成長して行けば、いずれ家を出て行く。蟬が穴を這い出るのは、蟬の一生を考えれば晩年期であろうが、旅立ちという点では共通している。そう、蟬の穴は蟬の空き家なのである。

水無月や手の甲に書く英単語

秀一

学生にとって七月は待望の夏休みを目前にして、最後の関門である期末テストに

追われる月である。難解な数字の公式や英単語を手を書いて行けたらいいのにと思う。このカンニングへの衝動に駆られたという高校生の会話を、車内で耳にしたのであろうか。

夕空を一気に掃けり夏燕

才美

夏つばめが飛んでいるのは、単なる虫の捕食ではなく、空を掃いているのだという発想の転換が良い。よく見られる状景を常識的に叙しただけでは、良い句にならない。

新婚の表札小さし花柘榴

秀一

表札が小さいのは、実際は、新婚家庭の準備がそこまで及ばず、間に合わせの板きれに手書きしたのかもしれない。でも評者は、若夫婦のこれからの人生に対する謙虚さによるものであると思いたい。立派な表札を掲げるかどうかは、実りある二人の人生を確かに築けた後で良いとしたのである。花石榴は若い二人を応援し、その成功を暗示するかのように咲いている。

振れ花らせんの先の宇宙かな

ツル子

振れ花を見た作者の連想は、地球空間を飛び越え、宇宙にまで達している。渦巻き星雲の宇宙であろうか。振れ花と宇宙の対比は面白い。しかし、俳句では原則

として季語の説明、即ち季語の属性を単に述べることは避けるべきとされている。「捩れ花」に対して「らせん」である。

ぱんぱんと叩きて干せり藍浴衣

友子

しわ取りの「ぱんぱん」である。主婦感覚の生活の実態に即した一句である。

路地裏の踏まれし枇杷の種ころり

ツル子

作者の目線は宇宙だけでなく、対極にある地上にも向けられている。路地奥の木に挽がれることもなく熟し、路面に落ちた実は、無残にも通行人に踏まれている。

燕の子遂に孵らず雨の宿

邦子

「雨の宿」は秋の「虫の宿」と同じように宿屋の意味でなく、民家であろうか。定点観察していた燕の巢には、何時まで経っても雛の姿が見えない。

パン種のふくむ時間も梅雨の月

守

パン焼を昔したことがあった。長い工程である。厨の台に置かれたパン生地は、パン酵母の働きで膨らんで行く。その豊かな時間を梅雨の月が見守っている。

なおざりの鉢植えの木に梅雨の雨

眞壽

「なおざり」という突き放した言い方が

良い。情緒を排して詠むのは難しいが、この句は成功している。

紫陽花を掠め着地の痩せ雀

明美

餌が豊富なこの時期に、痩せ細っている雀を発見した。餌取りが上手くいかない等、その雀には何らかの事情があるようである。

白あぢさゝる少年△の黒き影

明美

あの少年△である。誰しも題材にするのは躊躇する存在である。犯行時に少年であれば、また、精神的に病んでいればとして、自己の命で償うこともせずに受刑を免れた。唾棄する他ない存在である。未熟で不確かな精神医療の実態から目を背け、一定の期間がただ経過すれば、被害者遺族の思いを軽視するかのようになり、医療少年院から「白あぢさゝる」に象徴される平穏な社会に戻ってしまう。何か歪な戦後の刑事司法とその執行。作者は「黒き影」の復帰をやすやすと許してしまう司法と医療の実態に対しプロテストしたかったであろう。評者もこれには同意する。

伝統的な花鳥諷詠の美の世界は大事にすべきであるが、社会の実相を直視して詠むこともまた大事である。俳句という文芸は、短くてもそれを許容する幅のある器であると思う。

確かにこの句において、「白あぢさゐ」と「黒き影」との対比を用いたのは、俳句技法的に少し刺激的であったかもしれない。

よその子のたちまち育ち今年竹

弘子

確かによその子の成長は速く見える。しかし、俳句では原則として季語の説明、即ち季語の属性を単に述べることは避けるべきとされている。「今年竹」に対して「たちまち育ち」である。

紫陽花や共に訪ねし友の亡き

友子

「共」と「友」の音のリフレインが効いている。

花ねむや馬のまつ毛の長かりし 弘子

「花ねむ」は「花合歓」としたい。季語はその表記法を含めて永年の使用によって定着したもの。この句の場合、切れ字の「や」が置かれているので、違和感はない。

著莪の花一夜城址の土塁かな

幸

これでも良いが、「著莪の花土塁のひとつ崩れけり」とすることもできる。

五月晴翼となりし象の耳

才美

俳句は著作権法によれば、創作的著作物

である。それゆえ、俳句作者には観察力と描写力だけでなく、想像力も問われる。独創的な想像性である。

風通す急ごしらへの夏座敷

弘子

添削:膝崩す急ごしらへの夏座敷

夏座敷はよく風が通るものであるから、「風通す」は言わない。

ひと気なき庫裡低空の夏燕

友子

添削:ひと気なき庫裡の銅葺き夏燕

燕は低空にいる虫を捕食するものであるから、「低空の夏燕」とは言わない。

妹の手術に覚めし梅雨の入り

幸

添削:妹の手術のいかに梅雨の入り

「覚めし」であると手術前の麻酔に直結する。作者は手術結果を気に掛けているのではないか。

軽やかに吹く口笛やさくらんぼ 友子

添削:軽やかに来し口笛やさくらんぼ

口笛は吹くものに決まっているので。

不揃いの枇杷の甘みや夜風あり 邦子

添削:枇杷の実の甘み不揃ひ夜の風

何が不揃いなのかをはっきりさせる。

年輪のしやくなげ散りて茶室かな 幸

添削・大木の石楠花散るや一茶室

青紫蘇や両手いつぱい栄養素 ツ
ル子

年輪の意味をはつきりさせる。

添削・青紫蘇や畦いつぱいの栄養素

青梅と塩のバランス不確定 ヤ

虹の下今も洛中洛外図 才

エ子

美

添削・梅漬ける塩のバランス未確定

添削・二重虹今様洛中洛外図

半化粧上三枚を化粧して ツ

桑の実や疎開のころのこぬか雨 弘

ル子

子

添削・半夏生草上三枚の小揺れかな

添削・桑の実や疎開の頃へ小糠雨

星空や門口までの宿ゆかた 弘

桑の実は今目の前にあり、また、小糠雨は今現在降っている。

子

その小糠雨を媒介として、疎開の頃に小糠雨の中で摘んだ桑の実が思い出される。回想の句は、現在に引き戻すことが肝要。

添削・湖風や庭木戸までの宿浴衣

老が身の新たな浴衣夕の風 邦

小鳥来る柿の若葉の日毎伸ぶ 邦

添削・老の身の新たな浴衣浅草へ

子

子

添削・柿若葉日ごと濃くなり群れ雀

色づきし実梅ガーゼで拭ひけり ヤ

「小鳥来る」は秋の季語。

添削・拭ひたるガーゼ実梅の匂ひ立つ

大鎌の草刈る音や風を切る ヤ

添削・梅雨晴間鴉の声の喧し ヤ

エ子

エ子

添削・大鎌の草刈る音や遠浅間

贈られし薔薇の花束写真撮る 眞

「や」で切っているので、下五は大鎌とは別の事物・事象に係ることを言う。

添削・贈られし薔薇の花束写真館

ヨハネ祭高きヒールの洒落娘 ヤ

添削・黒南風や鴉三羽の啼きとほす

エ子

エ子

添削・踊り子の高きヒールやヨハネ祭

添削・黒南風や鴉三羽の啼きとほす

エ子

贈られし薔薇の花束写真撮る 眞

梅干しを干す笹梅雨で邪魔となる 眞

添削・贈られし薔薇の花束写真館

添削・梅干の干し笹部屋のだ真ん中 眞

添削・贈られし薔薇の花束写真館

壽

壽

緑蔭や赤子たちまち深眠り

才

谷戸風を海へ渡して遠郭公

才

美

美

添削・炎天の赤子たちまち寝入りけり

添削・谷戸の風海へ渡して遠郭公

梅雨晴間ウオーキングの旗の列

明

磨かれし「シャープ」の技術浮いて来い

美

明美

添削・梅雨晴間ワンデーマーチ休憩所

散文としては、言わんとする意味は良く

学園祭は若さの発露雲の峰

友

分かるが、「浮いて来い」は季語としては使われていない。

子

添削・学園祭の声上りけり雲の峰

(不在投句 古野明美、稲葉幸) (文責

ゆかた着の猿軍団や笑い声

幸

代表 増田守)

添削・笑ひ取る猿軍団の浴衣かな

梅雨空にビルの屋上雛巢立つ

眞

壽

添削・雨催ひビル屋上の巢立かな ただし、「巢立」は春の季語。よって、この句は春の句になる。

健康をねがいし梅酒つくりをり

ツ

ル子

添削・添え書きは「健やかにあれ」梅酒来る

十薬の香に立つ土の散歩道

邦

子

添削・十薬のかほり濃くあり散歩道

紫陽花が垣根飛び越え顔を出す

眞

壽

添削・紫陽花へ返す挨拶垣根越し